

われ、「祭政一理」が実現すると述べられている。このように、最晩年の祭政一致論では天皇の神格化が進むことにより従前の議論の弱点が克服されている。しかしそれは明らかに朱子学からの逸脱であり、「神皇」に対する独特の信仰は北畠親房や山崎闇斎の思想とも異質なものかもしれない。こうした神道思想の深化と天皇神格化の理由は様々に説明できようが、本発表で見てきたように、近世日本の歴史的条件下において朱子学の実践を追求したことによる一つの帰結としても理解できるのではないだろうか。

本居宣長における儒仏伝来の「記述」

森 和也

本居宣長が『日本書紀』ではなく『古事記』によつて「古道」を明らかにしようとした意図が那邊にあるかについては、『古事記伝』(以下『伝』)評価の核心に触れる問題であるだけに、古くから様々に議論がなされてきた。宣長の儒教と仏教に対する言及に着目することで、宣長が『古事記』を選択した理由について、一つの新しい視点を付け加えたい。

『日本書紀』と比較した場合、『古事記』には、儒教・仏教に関する記事の量が著しく少ない。仏教では、『日本書紀』欽明紀にある仏教伝に関する記述は『古事記』にはなく、また、聖徳太子に対しても用明天皇の御子として名が上がるだけである。『古事記』の世界において仏教は存在していない。儒教・仏教の影響を拭い去った「古道」というものを想定する宣長の見取図からすれば、『古事記』には、仏教の姿がないことは都

合が良かったのではないだろうか。また、『伝』の聖徳太子に対する注釈を見ると、宣長の意図的な仏教隠しが『伝』から読み取れる。『伝』では、「上宮之厩戸豊聡耳命」という名前の注釈に言葉が費やされ、仏教に関する記事は、『日本書紀』推古紀の聖徳太子伝を引用するなかで、慧慈に仏教を学んだことと、割注に引く『日本霊異記』の文中にわずかに存在するが、あくまで名前の注釈の流れで引用されるだけであり、『日本霊異記』から引く「勝鬘法華等經疏」などは、勝鬘經・法華經の講説として推古紀に見えているにもかかわらず、この箇所は注本文には引用されない。聖徳太子の仏教信仰については、批判すら抑制されている。宣長が歴史の上から意識的に仏教を排除しようとしていたことは、『統紀歴朝詔詞解』で、「三宝乃奴止仕奉流」の八文字にあえて訓読を施さなかったことも証左となり得るだろう。

一方、儒教について見てみると、応神朝の儒教伝来の記述では、『日本書紀』には無い『論語』と『千字文』の書名が『古事記』にはあり、『古事記』の方が詳しいが、『日本書紀』に見える継体朝での五経博士の来日の記事が無いなど、全体的には儒教においても『古事記』は言葉少なである。『伝』では、この応神朝の儒教伝来の記事の注釈において、応神朝に『千字文』の伝来があり得ないことを考証し、にもかかわらず『千字文』が記載された理由について言葉を尽くして考察しているが、『論語』については、『千字文』の考証の文脈で、「論語はさることなれども」と簡単に触れるだけであり、儒教の經典の伝来ということについて掘り下げた言及はなされていない。宣長の注釈

態度は、儒教においても仏教同様に忌避する傾向があるが、「書籍」という括りでは、一の巻の「古記典等総論」「書紀の論ひ」「直毘靈」などで、繰り返し書籍の伝来について言及し、この伝来が「漢意」を日本に瀾漫させる発端となったことを指摘している。よく知られた意・事・言の関係式において、「すべて意も事も、言を以て伝るものなれば、書はその記せる言辞ぞ主には有ける」(『古記典等総論』)と、とりわけ「言」に力点を置く宣長にとって、「言」を記した書籍は、その内容を議論する以前に、媒体として重要な働きをするものであった。そのことから『論語』と『千字文』の伝来は、単に漢文が伝わったということではなく、その漢文には必ず漢意が伴うことで、漢意の伝来をも意味するものであったと考えることができる。

しかし、宣長のこうした発想法によって、『論語』の内容の言及が不要と考えられたのか、あるいは、やはり言及そのものを忌避したのかという点についての疑問は残る。宣長は、儒仏に汚染されていない「古道」の姿を伝える書物である『古事記』から数少ない儒仏の要素すら徹底して排除しようとしたと私は考えているが、そのことは、太安万侶の序に対する注釈で、撰者である安万侶には本文から「陰陽乾坤」などの漢意的な用語を排除する意思があったと宣長が指摘していることから、それは認められるのではないだろうか。

平田篤胤の『黄帝伝記』について

—— 神道と道教との関連で ——

坂出 祥伸

平田篤胤は秋田から上京した翌年、文政七年に『黄帝伝記』三巻を著わしたが、これを始めとして爾後中国、特に道教に関する著作を立て続けに著わしている。これらはいずれも内容的に相関連した著作と思われるが、今は『黄帝伝記』を取り上げて考察したい。

黄帝というのは司馬遷『史記』の巻頭「五帝本紀」の最初に置かれる伝説上の人物であるが、篤胤が綴る黄帝の伝記は、これにもとづいているのではない。明末・崇禎十三年に刊行された薛大訓纂輯『神仙通鑑』六十巻の巻一「軒轅黄帝」、巻三「廣黄帝本行記」の記述にほとんどとづき、両者を組み合わせて構成記述されていて、『史記』「五帝本紀」の黄帝紀でいくらか補っている。ところで、不可解なことに、『黄帝伝記』の書名が、門人記『菅能屋先生著述書目』など三種の書目のいずれにも載せられていないのである。にもかかわらず、『大壑君御一代略記』文政七年(一八二四)の項には「黄帝伝記稿成」と記されている。

篤胤の描く黄帝の伝記

先ず巻上の冒頭では、「黄帝なる者は、姓は公孫、有熊罔君の少典の次子なり。その母を附宝と名く、大電光の北斗枢星を繞て郊野に照すを見て感じて娠有り。二十四月にして黄帝を壽丘に生む、軒轅と号す」と述べて、神秘的な感生帝伝説で始められている。続いて、強暴で黄帝に従わない蚩尤氏、ついで諸